佛教大学　文学部論集　第107号（2023年３月）

論　文

近代知識人の日常生活と娯楽経験（続）

――戦後の『王伯祥日記』を例に――

楊　　韜

〔抄　録〕

本稿は、拙稿（2022）の続編であり、戦後における情況を補足的に整理・分析・考察したものである。前稿に続き本稿では同じく『王伯祥日記』を扱うが、主に1950～1966年の『王伯祥日記』を対象に、彼の中華人民共和国建国初期から文化大革命が始まるまでのおよそ15年間の日常生活と娯楽行動の実態を考察した。言うまでもなく、戦前と戦後における情況は、変化した国内外の政治的・社会的背景による異同が見られる。戦前から継承されている側面としては、王伯祥の中国伝統芸能に対する変わらぬ関心と情熱がみてとれる。他方、新しい側面も複数に現れた。とりわけ、テレビ放送の開始と定着が彼の娯楽享受の行動範囲とスタイルを大きく変えた。また、彼の娯楽経験において、伝統芸能と現代的なパフォーマンスの要素を融合して新たに作られた所謂「新時代芸能」も加わり、それは娯楽のジャンル或いは内容において大きな比重を占めた。外国の娯楽文芸との接触に関しては、戦前上海でアメリカを中心となる西洋的なものを日頃から接した状況から一変し、ソ連を中心とする「社会主義陣営」の娯楽文芸に最も密接に接触するようになったのである。

キーワード　『王伯祥日記』、娯楽経験、伝統文芸、新時代芸能、外国文芸

1　はじめに

本稿は、拙稿（2022）の続編であり、戦後における情況を補足的に整理・分析・考察したものである。前稿に続き本稿では同じく『王伯祥日記』を扱うが、主に1950～1966年、すなわち中華人民共和国建国初期から文化大革命が始まるまでのおよそ15年間の日記を考察対象として取り上げる。本稿の構成としては、まず新中国建国以降における王伯祥の日常生活や行動パターンとその娯楽経験との関連性を分析し、その影響要素ならびに特徴を考察する。その際、テレビ放送の開始とその定着など、娯楽と密接に関係する物理的に重要な外部環境／条件にも

留意する。次に、伝統芸能をはじめ、映画・話劇・雑技・スポーツ観戦、さらに新しいスタイルの文芸など、国内の娯楽文芸との接触情況を具体的に考察する。最後に、東西冷戦期にあたるこの時期において、中国にいる王伯祥は、どのような諸外国の娯楽文芸に接したのか、その際にどのような認識や評価を持っていたのかにも注目し、検討する。

2　日常生活や行動パターンとその娯楽経験との関連性

(1) 移住・出張などとの関連について

拙稿（2022）においてすでに触れたように、王伯祥は、長年にわたり上海に暮らして商務印書館や開明書店の編集者として主に文学史などの関連出版物の編集を担当していた。新中国建国後、鄭振鐸の誘いを受け、王伯祥は北京大学文学研究所（現在の中国社会科学院文学研究所）の研究員となり、北京へ移住した。王伯祥は、北京移住にあたり、1950年７月下旬に上海の自宅を売却し、同年９月下旬に北京の新居を購入した。この引っ越しの前後において、彼の娯楽行為にも大きな変化がみられた。すでに拙稿（2022）において詳しく述べたように、1937年以降、王伯祥とその家族は頻繁に「書場」即ち評弾上演の専門的会場に足を運び、「聴書」即ち評弾のことを楽しんでいた。しかし、評弾は主に江南地域の文芸であり、北京では接する機会はそれほど多くない。地方からの評弾専門団体が上京して公演を行うこともあるが、日常的に気楽に楽しめる娯楽ではない。その影響もあってか北京移住以降、『王伯祥日記』における「聴書」あるいは「評弾」に関する記述はめっきり減少した。とりわけ、引っ越しを控えた1950年夏には惜しむように一時期かなり頻繁に「聴書」しに行った。そして、1951年以降、これまで中心としていた昆劇や評弾の代わりに、京劇鑑賞は最も多く接する娯楽ジャンルとなった。このことから分かるように、娯楽経験には所在地域による影響が顕著である。同じ傾向が出張など一時期北京から離れた時期にもみられる。その際には主に、滞在していた各地域の地方的な方言文芸を享受していた。例えば1959年12月の河南省出張の際には豫劇を、1962年１月の上海・浙江省出張の際には越劇を、さらに1964年10月の四川省出張の際には川劇を、それぞれ楽しんでいたことが挙げられる。

(2) 自身の体調及び家族の病気などとの関連について

王伯祥の勤務時間以外の外出に関しては、家族や親しい知人たちと一緒に出掛けてお芝居や展覧会などを鑑賞することが多い。しかし、老年期に入ると、自身の体調不安から外出を控えるようになったことも日記から見て取れる。1950年元旦の日記には、自身の体の衰えを悲しむような告白をしている。1964年２月23日の日記には、「夜は外出せず、家族からイベントの見聞や舞台に関する感想を聞くようにする」との記述があるが、実際にこの時期から外出は徐々に減っていた。また、1965年９月23日の日記には、「最近、視力悪化のため、夜は外出を恐れ

る」と書いているほか、同年11月30日の日記には、視力の低下によって誘われた観劇を諦めたことも記している。つまり、体力の不足に加えて視力の衰えによっても王伯祥の外出に制限がかかり、それが間接的に娯楽の減少にもつながった。一方、家族の病気などにも、一時期的に影響があった。とりわけ、妻の秦珏人は1954年以降病気が徐々に悪化し、1955年６月に病死した。その間には、王伯祥は日常の世話だけでなく、常に不安や心配があったため、自然に娯楽から遠ざかってしまった。ほかには、息子や孫などが病気となった時期にも、多忙と不安から一時期的に娯楽を控えていた。

(3) 娯楽に関係する物理的外部環境／条件との関連について

娯楽の享受に当たっては、当事者の生活環境ならびに物理的な条件は非常に重要である。戦前から、王伯祥はよく夜自宅でレコードやラジオ放送を聴いたが、1959年を境に徐々にテレビ視聴へ変わり、1960年以降ほぼ毎日自宅でテレビが放送する娯楽番組を視聴するようになった。中国のテレビ放送は1958年９月に「北京電視台（現中国中央電視台の前身）」によって開始したが、初期においての受信範囲は北京市域に限られていた。そのため、王伯祥も出張や療養など一時期北京から離れた場合、テレビの視聴ができなかった。

最初にテレビを購入した時のエピソードは日記に詳しく記録されている。1958年９月１日の日記には、「潤児（長男の王潤華）と一緒に王府井大街へテレビを買いに行った。潤児の勤務先による紹介状を持参したが、ソ連製のブランドである「紅宝石」や「紀録」のテレビは個人への販売がされておらず、結局チェコ製のテレビを購入した。値段は590元だった。（中略）先を争うように現代科学製品を購入して享受ことも時代に順応することと言えるが、人生初の行動に出た。」[(1)]と綴っている。翌日には、電線やアンテナなどの配置を行い、夜７時半に初めて受信に成功した。当日の番組は、７時半からは歌謡曲やニュース、８時からはソ連映画だったが、夜10時に放送が終了した。また、当分毎週火曜・木曜・土曜・日曜の各日に同じ時間帯の放送があると知らされた。しかし、早くも９月11日にテレビが故障し、修理を経てようやく10月下旬に再び視聴できるようになった。その後もテレビ本体の故障・修理、またテレビ局による一時放送停止などがあったが、1960年以降は基本安定した視聴となり、王伯祥一家の日常生活においてはテレビ視聴が不可欠な娯楽行為となった。テレビ視聴が日常の娯楽の中心になっていくにつれ、これまでにあった外出して娯楽を享受するスタイルが大きく変えられたと言える。この時期のテレビ視聴に関しては、もう一つの特徴が日記からみられる。すなわち、当時のテレビ放送には製作されるコンテンツが少ないため、よく劇場で上演した映画や舞台をそのままテレビで放送していた。そのため、王伯祥が劇場で実際に見た映画・伝統劇・話劇などを後日になって再びテレビで視聴することもあった。たとえば、1960年11月12日の夜に、長男が大華戯院でソ連映画『海軍少尉巴寧』を観ているが、同じ時間帯に王伯祥は二人の孫と一緒に自宅でテレビを通じて同じソ連映画を観たとのエピソードが綴られている[(2)]。

一方、戦前からレコードやラジオでよく伝統劇や伝統音楽などを聞いていた王伯祥は、北京に移った後は主に「北京電台」のラジオ放送を受信していた。1956年11月26日の日記には、新しく天津製のラジオ受信とレコード再生できる「両用機」を153元で購入したことも漏れなく記録されている。

(4) その他について

王伯祥の娯楽行動に直接に影響を与える要因としては、ほかにも1950年前後の（台湾へ逃れた国民政府軍による）空襲、自宅の改築工事や設備の修理工事、居住エリアの停電などが挙げられる。また、一時期に限定されたものとしては、国内外における政治情勢の動向や政治運動による影響も無視できない。一例を挙げておこう。1953年３月初旬にソ連の最高指導者であるスターリンが死亡した一報が伝わると、中国でも大規模な追悼行事が実施された。王伯祥の日記には、次のような記述がある。「偉大な同盟国最高指導者に対する中国人民の哀悼と敬意を表するため、中央人民政府から以下の命令が伝達された。全国範囲で３月７日から９日までの三日間の間、国旗の半旗を掲げる。企業・軍隊・機関・学校および各人民団体では、この追悼期間中には宴会と娯楽を停止する。」[(3)]他方、建国初期から、中国国内において、「百花斉放・百家争鳴」・「三反五反」・「抜白旗・挿紅旗」・「反右傾」など、次々に政治運動が起こった。たとえば、「百花斉放・百家争鳴」の所謂「双百」運動に関しては本来、異なる意見を率直に出し合い議論する環境を作る方針のはずだったが、実質的な実現がなされておらず、文芸創作に必要な真に寛容な環境は生まれなかった。反対に、これらの一連の政治運動は、むしろ娯楽と直接に関わる多くの文芸関係者（とりわけ文学者や戯曲家たち）に悪影響が及んだため、それによって生じる混乱も様々な文芸分野の娯楽現場へと間接的に波及した。無論その背景には、毛沢東の「文芸講話」に従い「工農兵のために奉仕する社会主義リアリズム」を反映／歌頌する作品の製作が強く奨励／優先され、そうでない作品は批判／排除される現象・傾向があった。このような現象・傾向は、文化大革命直前の1965年あたりからますます顕著となった。

戦前まで上海で暮らした王伯祥は、現地の劇場や映画館などへ頻繁に足を運んだ。拙稿（2022）には、日記から大世界・東方書場・東華大戯院・卡爾登・中央戯院・金城大戯院・南京大戯院・蘭心大戯院など当時上海の代表的な娯楽施設を抽出して記述している。一方、北京へ移住して以降の主な娯楽消費を行った場所としては、吉祥戯院・大華戯院・広和戯院・中和戯院・長安大劇院・大衆劇場・紅星劇場・天橋劇場・北京劇場・首都電影院などが挙げられる。なかには、最もよく訪れた劇場は北京の東安市場にある吉祥戯院であることも日記から確認できる。また、展示物を鑑賞することも多い王伯祥だが、最もよく訪れたのは故宮博物院で開催された展覧会である。

王伯祥の娯楽行動は個人で行うことが多く、時には家族や知人とともに行った場合もある情況については、すでに拙稿（2022）で言及した。このようなことは、戦後になってからも基本

的に同じくみられる。新しい現象／傾向としては、1950年代に入ってからは孫とともに出かけること、及び1960年以降は自宅で孫と一緒にテレビを視聴することが多くなった点が挙げられる。

3　国内の娯楽文芸との接触情況

(1) 京劇・昆劇・評弾・各地方劇などの伝統芸能について

戦前に続き、戦後王伯祥の娯楽において大きな割合を占めているのは、京劇・昆劇・評弾・各地方劇などの伝統芸能である。（表１参照）この点については、すでに拙稿（2022）において詳しく論じているため、ここではテレビでの視聴という新しい側面に関する補足に留める。先述したように、1960年以降、王伯祥一家の日常生活においてはテレビ視聴が不可欠な娯楽行為となったが、そのなかにおいても京劇などの伝統芸能番組の視聴は多い。番組の形式としては、劇場の舞台を中継して放送するものと、舞台を録画して放送するものが挙げられる。ここでは一例として、日記に記録された名優・梅蘭芳逝去一周年記念をめぐる当時の情況を確認してみよう。

1962年夏に行われた梅蘭芳逝去一周年記念イベントは大規模なものだったが、王伯祥はほとんどテレビを経由するような形で関与した。とりわけ、８月７日から８月10日の四日間において、毎日欠かさず記念放送を視聴した。鑑賞した演目は、８月７日に梅蘭芳本人が生前出演した京劇映画『洛神』（図版１参照）；８月８日に『宇宙鋒』（李玉英出演）と『霸王別姫』（杜近芳・袁世海出演）；８月９日に『春秋配』（楊秋玲出演）と『貴妃酔酒』（杜近芳出演）と『大登殿』（譚富英・梅葆玖出演）；８月10日に『蘇三起解』（李玉英出演）と『天女散花』（梅葆玖出演）と『二堂舎子』（馬連良・張君秋出演）である。その後、10月３日にもテレビでドキュメンタリー作品だと思われる番組『梅蘭芳芸術生活』を視聴した。このように、劇場へ出向かうことがなくても自宅で伝統芸能を享受できるようになったことは、戦前とは大きく異なる点だと言える。

図版１　京劇映画『洛神』DVDジャケット
出所：筆者所蔵

表１　京劇・昆劇・評弾・各地方劇の一部例（1950～1966）

種別	日記で言及された作品名／演目名（経験した時間と場所）	日記で言及された作品／演目の関係者・団体・機関など
京劇	『牛郎織女』（1952年、吉祥戯院）、『呂布與貂蟬』（1956年、大衆劇場）、『起解』（1956年、ラジオ放送）、『赤壁之戦』（1959年、テレビ放送）、周信芳舞台生活60年記念会（1961年、テレビ放送）、『武則天』（1962年、テレビ放送）、『龍女牧羊』（1962年、テレビ放送）	中国戯曲研究院京劇実験工作第一団、中国京劇院、杜近芳、馬連良、周信芳
昆劇（曲）	『長生殿』（1956年、広和戯院）、『琵琶記』（1957年、文協大楼）、『十五貫』（1960年、テレビ放送）	北京市昆曲研習社
評弾	『杜十娘』（1958年、ラジオ放送）、『玉連環』（1959年、静園）、『秋思』（1962年、北京劇場）	常熟評弾団、上海長征評弾団
地方劇	越劇『紅楼夢』（1954年、実験劇場）、閩南劇『陳三五娘』（1955年、吉祥戯院）、湘劇『劉海砍樵』（1956年、吉祥戯院）、川劇『望江亭』（1957年、長安戯院）、豫劇『断橋』（1957年、吉祥戯院）、邵劇『孫悟空三打白骨精』（1963年、テレビ放送）	天津市越劇団、福建省閩南戯実験劇団、常香玉

出所：『王伯祥日記』に基づき、筆者作成。

(2) 国内の映画・話劇・「新時代芸能」などについて

国内の映画や話劇の鑑賞に関する記述については、戦前から引き続き王伯祥の日記に散見する。（表２参照）ここでは複数の事例を取り上げ、当時の中央政府が打ち出している国内外向け宣伝の政策や方針にかかわる側面を考察したい。たとえば、1952年４月16日夜に、王伯祥が家族とともに大華戯院を訪れ、軍委文工団が出演する話劇『控訴』を鑑賞した。この舞台について彼は、主演俳優の藍馬と周芻を評価するものの、ほかの出演者のパフォーマンスを「応卯点景」、即ち「いい加減にごまかしている」に過ぎずと不評だった。また、この話劇作品のプロットは「目下の宣伝政策に合わせた」ものだと明言している[(4)]。もう一例を挙げよう。1958年８月21日から24日まで、王伯祥は連日東四劇場で「弾詞」や「評弾」などを楽しんでいたが、所謂「社会主義総路線」などを合唱して宣伝する演目や上海の「飲食業服務大躍進」ぶりを反映し謳歌するものもあった[(5)]。ほかに、1960年３月河南省出張中の王伯祥は新しい婚姻法を宣伝する時事劇を鑑賞したことや1961年12月に朝鮮戦争における「抗美援朝（中国がアメリカに抵抗して北朝鮮を支援する）」関連のテレビ番組『烽火列車』を観たことなどもある。

一方、1960年半ば以降、京劇などの伝統芸能に話劇・バレエ・モダンダンス・歌舞劇などの要素を取り入れ融合させた所謂「現代京劇」や「革命バレエ」のような新しいタイプの芸能が生まれた。ここでは筆者が検討の便宜上暫定的に「新時代芸能」と名付けて検討してみたい。以下、王伯祥の日記から確認できる複数の事例を挙げよう。1964年５月22日にテレビで放送した現代京劇『蘆蕩火種』（北京京劇団出演）；1964年７月２日にテレビで放送した現代京劇『紅灯記』（中国京劇一団出演）；1964年７月２日に政協礼堂で上演した現代京劇『草原英雄小姉

妹』（内モンゴル自治区芸術劇院京劇団出演）；1964年７月５日にテレビで放送した現代京劇『黛女若』（雲南京劇団出演）；1964年７月７日に政協礼堂で上演した現代京劇『黛女若』（雲南京劇団出演）；1964年12月29日に天橋劇場で上演した「革命バレエ」である『紅色女子軍』；1965年２月21日にテレビで放送した現代京劇『沙家浜』（北京京劇団出演）など。これらの舞台作品に関する王伯祥の評論を確認してみると、現代京劇『草原英雄小姉妹』に関しては「昨年冬の烏蘭察布盟にいる龍梅（11歳）と玉栄（９歳）が暴風雨と闘い、放牧を勇敢に成し遂げた物語を表現している」[(6)]と論じ、現代京劇『黛女若』に関しては、「少数民族である景頗族の若い女性の翻身劇」[(7)]と評価し、現代京劇『沙家浜』に関しては「この作品は『蘆蕩火種』を作り直したものであり、武術のシーンや人物像の描写などにおいて多くの改編が見られる」[(8)]と述べている。

この時期の「新時代芸能」に関しては、一番よく知られ最も大きな影響を及ぼしたのは大型音楽舞踊詩『東方紅』である。（図版２）『東方紅』は建国15周年を記念し1964年北京で上演された大型音楽舞踊詩であり、中国共産党の誕生と革命闘争の歴史を、歌と舞踊と詩で綴る舞台作品である。プロとアマチュアをあわせて3000人以上が上演に加わり、全35段からなり、革命歌曲39曲、詩の朗唱18段、場面展開37を含む一大ページェントである。翌1965年には映画化もされた[(9)]。王伯祥の日記には『東方紅』に関する記述も多くみられるが、以下に詳しく確認しておこう。

王伯祥が初めて鑑賞した『東方紅』は、1964年10月２日の「国慶節」テレビ特別番組だった。

図版２　『東方紅』舞台写真

出所：『新中国電影史　1949-2000』（湖南美術出版社、2002）

この日に人民大会堂で、彭真北京市長が各国の来賓を招き大型歌舞史詩『東方紅』を上演した。そのテレビ中継を観た王伯祥は、「首都の各文芸団体に工業・学生・アマチュアの文芸者が加わり、一堂に会して大合唱・集団舞踊・種類別舞踊などを行った。合わせて八場の出し物を合計3000人で仕上げ、革命時代から今日までの歴史を様々な表現方法を用いて表現した。誠に空前の巨観である」(10)と述べている。数日後の10月５日に、今度は国務院機関事務局の招待を受け、人民大会堂へ赴き、実際の『東方紅』上演舞台を堪能した。日記によると、この日の上演は夜７時40分からスタートして、10時に終演した。この日の日記には、「前日テレビで拝見した際にすでに空前なものだと感慨したが、今日は現場で観ることができ、舞台背景の変化・色彩の煌びやか・場面の宏大さ・表現力の感動さなどはいちいち眼の前に実体験できた。プロットはすでにある程度把握済みだが、ますますはっきりと理解できた。視力が弱く望遠鏡に頼らざるを得ないが、始終奮いたち、まったく疲れを感じなかった」(11)と述べている。その後、1964年10月８日と1965年３月12日にも自宅で孫と一緒にテレビで『東方紅』を複数回視聴した。翌1965年に『東方紅』が映画化されてまもなく、王伯祥は10月４日に首都電影院へ行き映画版『東方紅』を観た。さらに、1966年の５月19日にはテレビで、７月18日には工人倶楽部で再度映画版『東方紅』を観た。

このように、『東方紅』を筆頭に、当時の中国で最も人気の高い三大作品、所謂「三紅」＝『東方紅』・『紅色女子軍』・『紅灯記』を、王伯祥は漏れなく全部熱心に鑑賞した。

表２　国内映画・話劇の一部例（1950～1966）

種別	日記で言及された作品名／演目名（経験した時間と場所）	日記で言及された作品／演目の関係者・団体・機関など
映画	『龍須溝』（1952年、大華戯院）、『梁山泊與祝英台』（1954年、大華戯院）、『平原遊擊隊』（1956年、交道口電影院）、『海魂』（1958年、首都電影院）、アニメ『白雪公主』（1958年、テレビ放送）、『白毛女』（1958年、テレビ放送）、『林則徐』（1959年、テレビ放送）、『劉三姉』（1962年、テレビ放送）、『女理髪師』（1963年、テレビ放送）、アニメ『孫悟空大鬧天空』（1963年、テレビ放送）	袁雪芬、范瑞娟
話劇	『非这様生活不可』（1954年、北京劇場）、『虎符』（1957年、首都劇場）、『百丑図』（1958年、小経廠劇場）、『三姉妹』（1960年、首都劇場）、『駱駝祥子』（1962年、テレビ放送）、『蔡文姫』（1962年、テレビ放送）、『武則天』（1962年、テレビ放送）、『霓虹灯下的哨兵』（1963年、テレビ放送）、『茶館』（1963年、テレビ放送）	北京人民芸術劇院、郭沫若、朱琳、于是之、欧陽予倩

出所：『王伯祥日記』に基づき、筆者作成。

(3) その他について

以上は、伝統芸能から映画・話劇・「新時代芸能」までの情況について述べたが、その他の

娯楽経験にも簡単に触れておきたい。（表３参照）王伯祥は、時々公園や近郊などへのプチ旅行に出かけることもあるが、さまざまな展覧会へ頻繁にも顔を出している。戦前にはなかった娯楽として、スポーツ観戦が挙げられる。

表３　その他の一部例（1950～1966）

種別	日記で言及された項目（経験した時間と場所）	日記で言及された関係者・団体・機関など
その他	崔承喜劇団舞踊劇（1952年、小経廠劇場）、相聲『改行』（1956年、ラジオ放送）、関漢卿創作七百年記念展覧会（1958年、故宮）、天馬舞踊芸術団舞踊（1959年、天馬舞踊芸術工作室）、雑技（1961年、東単広場）、国画彫刻連環画展覧会（1964年、北京美術館）	崔承喜劇団、天馬舞踊芸術団、呉暁邦、中国雑技団

出所：『王伯祥日記』に基づき、筆者作成。

４外国の娯楽文芸との接触情況

次は、東西冷戦期において、中国大陸にいる王伯祥は、どのような諸外国の娯楽文芸に接したのか、その際にどのような認識や評価を持っていたのかにも注目し、検討を行う。

1950年代の王伯祥日記に言及された外国文芸については、圧倒的に多いのはソ連のものである。（表４参照）周知のように、1950年に中国とソ連との間に「中ソ友好同盟互助条約」が結ばれ、その後両国は蜜月期に入った。その後、ソ連側から技術や資金の提供、また専門家派遣などの形で新中国の建設に大規模な援助を受けた。当然のように、中国国内には中ソ友好のムードが高まった。このような情勢は中ソ対立が徐々に表面化となった1960年代初期頃まで続き、中ソ友好協会によって実施された様々な活動が大きな宣伝効果をもたらした。映画上映を中心に、舞踊会・音楽会・合唱会・ロシア語コンテストなど、多様多種のソ連文化関連イベントが頻繁に行われた。その結果として、中国の人々にも簡単にソ連もしくは東欧諸国の文化や芸能と接触する環境がうまれた。王伯祥もこのような環境のもと、頻繁にソ連映画を鑑賞したり、舞台や展示会を観覧したりするようになった。王伯祥の感想の一部を紹介しておこう。たとえば、1955年11月10日に天橋劇場で「モスクワ小白樺樹舞踊団」の舞台を観たあとその舞台を「五光十色、玲瓏活発」と高く評価しただけでなく、その踊りの動きまでを、『洛神賦』にある表現「翩若惊鴻、婉若游龍」を引用して細かく描写している[(12)]。他方、王伯祥が最も多く接触したのは映画であるが、彼の日記においてあまりにも多く言及しているため、ここでは二つの事例のみを挙げるに留める。1954年11月15日に大華戯院でソ連映画『山中防哨』を鑑賞した際に、「８時開演、10時半に終演した。かなり緊張感があり、国境及びスパイ活動防止の教育に大いに有益な映画だ」と綴っている[(13)]。「中ソ友好同盟互助条約」が交わされてから11

図版３　遼寧人民芸術劇院が上演するアルバニア話劇『漁人之家』舞台写真
出所：『歴史回放　舞台輝煌　中国話劇誕生110周年紀念図冊』（文化芸術出版社、2017）

周年にあたる1961年２月に、北京では関連イベントが行われた。２月13日に王伯祥も自宅のテレビで記念イベントの様子を確認し、さらに中ソ合作映画『風従東方来』を鑑賞した。外国文芸との接触においてソ連のものが中心だったが、東ドイツ・ハンガリー・チェコ・ポーランド・ルーマニア・ブルガリアなど所謂「社会主義陣営」に属する東欧諸国の娯楽文芸も時々接していた。（表４参照）

1949年まで、中国の映画市場において圧倒的な存在だったアメリカ映画は、朝鮮戦争の勃発後大幅に制限されるようになった。1950年以降、アメリカ映画は勿論、所謂「資本主義陣営」に属する西側諸国の娯楽文芸は基本中国から消えた。しかし、少数ながら王伯祥の日記から一部確認できる。（表４参照）たとえば、1959年１月27日に太陽廟体育館でフランスのサーカスを楽しんでいたほか、自宅のテレビでそれぞれ1962年10月24日にスペイン映画『房客』、1963年５月24日にイギリス映画『兵士的経歴』を観た。

アジア・アフリカ地域に関しては、（北）朝鮮・ベトナム・ビルマ・キューバ・インド・スーダン・イラク・アルバニアといった国々の映画・歌劇・バレエなどにも幾度となく接触した。（表４参照）日本に関しては、1950年代において未だ正式な国交回復がないものの、演劇や映画関係者の相互訪問やスポーツ試合の開催など、日中双方の民間文化交流が行われていた。王伯祥の日記からも一部関連の記述が見られる。（表４参照）

表４　外国の娯楽文芸の一部例（1950～1966）

地域別	日記で言及された作品名／演目名（経験した時間と場所）	日記で言及された作品／演目の関係者・団体・機関など
ソ連・東欧諸国	ポーランド経済展覧会（1953年、労働人民文化宮）、ソ連映画『瑪利娜的運命』（1955年、大華戯院）、ソ連映画『脖子上的安娜』（1955年、大華戯院）、ソ連映画『断剣』（1955年、北京劇場）、ソ連映画『革命的前奏』（1957年、首都電影院）、八一隊とルーマニア隊のサッカー試合（1959年、テレビ放送）、ソ連バレエ『天鵝湖』（1959年、テレビ放送）、ルーマニア映画『雪山救戦友』（1961年、テレビ放送）、ソ連映画『火熱的心』（1961年、テレビ放送）、チェコ映画『最高原則』（1961年、テレビ放送）、中国とハンガリーの卓球試合（1962年、テレビ放送）、ポーランド映画『十字軍』（1962年、テレビ放送）	ソ連国家大劇院バレエ舞団
西欧諸国	スウェーデンバレエ、イギリス映画『紅菱艶』（1962年、テレビ放送）、スペイン映画『房客』（1962年、テレビ放送）、イギリス映画『兵士的経歴』（1963年、テレビ放送）	スウェーデン皇室歌舞団
アジア・アフリカ諸国	日本映画『混血児』（1955年、蟾宮）、インド映画『印度的芸術與建設』（1955年、紅星劇場）、インド映画『章西女皇』（1957年、大華戯院）、日本書法纂刻展覧会（1958年、道寧廠斎）、中国とベトナム友好晩会（1960年、テレビ放送）、朝鮮映画『金剛山的姑娘』（1961年、テレビ放送）、中国と日本の卓球試合（1961年、テレビ放送）、中国とビルマの卓球試合（1961年、テレビ放送）、ベトナム映画『同一条江』（1961年、テレビ放送）、日本合唱団上演会（1961年、テレビ放送）、アルバニア話劇『漁人之家』（1961年、テレビ放送）、ベトナム映画『阿浦夫婦』（1962年、テレビ放送）、メキシコ映画『躲蔵的天堂』（1963年、北京展覧館電影院）、日本工業展覧会（1963年、北京展覧館）	キューババレエ団、ベトナム歌舞団、スーダン文化代表団

出所：『王伯祥日記』に基づき、筆者作成。

5　結びに

以上、1950～1966年の『王伯祥日記』を対象に、彼の中華人民共和国建国初期から文化大革命が始まるまでのおよそ15年間の日常生活と娯楽行動の実態を考察した。言うまでもなく、戦前と戦後における情況は、変化した国内外の政治的・社会的背景による異同が見られる。戦前から継承されている側面としては、王伯祥の中国伝統芸能に対する変わらぬ関心と情熱がみてとれる。他方、新しい側面も複数に現れた。とりわけ、テレビ放送の開始と定着が彼の娯楽享受の行動範囲とスタイルを大きく変えた。また、彼の娯楽経験において、伝統芸能と現代的なパフォーマンスの要素を融合して新たに作られた所謂「新時代芸能」も加わり、それは娯楽のジャンル或いは内容において大きな比重を占めた。外国の娯楽文芸との接触に関しては、戦前

上海でアメリカを中心となる西洋的なものを日頃から接した状況から一変し、ソ連を中心とする「社会主義陣営」の娯楽文芸に最も密接に接触するようになったのである。

〔注〕

（1）『王伯祥日記』、1958年９月１日。
（2）『王伯祥日記』、1960年11月12日。
（3）『王伯祥日記』、1953年３月７日。
（4）『王伯祥日記』、1952年４月16日。
（5）『王伯祥日記』、1958年８月21日。
（6）『王伯祥日記』、1964年７月２日。
（7）『王伯祥日記』、1964年７月７日。
（8）『王伯祥日記』、1965年２月21日。
（9）天児慧ほか編『岩波現代中国事典』（岩波書店、1999）、949頁。
（10）『王伯祥日記』、1964年10月２日。
（11）『王伯祥日記』、1964年10月５日。
（12）『王伯祥日記』、1955年11月10日。
（13）『王伯祥日記』、1954年11月15日。なお、ソ連映画『山中防哨』の概要ならびに当時ソ連映画の上映裏にある中国側の意図については、余敏玲（2015）第四章を参照されたい。

〔文献一覧〕

〈日本語（五十音順）〉
天児慧ほか編『岩波現代中国事典』（岩波書店、1999）
楊韜「近代知識人の日常生活と娯楽経験：戦前・戦中の『王伯祥日記』を例に」『文学部論集』第106号、佛教大学、2022

〈中国語（ピンインローマ字順）〉
連輯主編『歴史回放　舞台輝煌　中国話劇誕生110周年紀念図冊』（文化芸術出版社、2017）
劉平『中国話劇百年図文志』（武漢出版社、2007）
劉文兵『日本電影在中国』（中国電影出版社、2015）
金宜鴻『新中国文芸政策与中国当代電影発展』（世界図書出版広東有限公司、2014）
尹鴻・凌燕『新中国電影史　1949―2000』（湖南美術出版社、2002）
余敏玲『形塑「新人」：中共宣伝與蘇連経験』（中央研究院近代史研究所、2015）
王伯祥著／張廷銀・劉応梅整理『王伯祥日記』（中華書局、2020）

〔付記〕

本稿は、科学研究費【基盤研究（Ａ）『建国初期中国を移動する身体芸術メディア・プロパガンダ：戦時期からの継承と展開』（研究代表者：星野幸代）】の研究分担金の交付を受けて行った研究成果の一部である。

（よう　とう　中国学科）

2022年11月15日受理